

本サービスにおける著作権および一切の権利はアイティメディア株式会社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスの出力結果を無断で複写・複製・転載・転用・頒布等を行うことは、法律で認められた場合を除き禁じます。

「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論 一番外編一:

Twitter大嫌いな研究員が、覚悟を決めた日

<http://eetimes.jp/ee/articles/1205/09/news003.html>

Twitterなる奇妙なコミュニケーション手段が登場した時、「こんな珍奇な通信手段、一刻も早く消えて無くなってしまえ!」と願ったものです。しかし間違っていたのは、私でした。

2012年05月09日 08時00分 更新

[江端智一, EE Times Japan]

われわれエンジニアは、エンジニアである以上、どのような形であれ、いずれ国外に追い出される……。いかに立ち向かうか?→「[『英語に愛されないエンジニア』のための新行動論](#)」連載一覧

本連載の第2回「[英語に愛されない者は何をしても愛されない、という出発点](#)」の番外編をお届けします。

(エピソードその1)「逢ひみての 後の心にくらぶれば 昔はものを 思はざりけり ~権中納言敦忠~(あなたとお会いした後に比べると、昔は、な一んにも考えていなかったんだなーと思いますー江端意識一)」。

ご存じの通り、有名な百人一首の和歌です。私はこの和歌を初めて聞いた時、「お前、民衆をなめとんのか」とひとり突っ込んだものです。こんなひどい為政者(いせいしゃ)が、我が国の大臣を務めていたかと思うと、貧困や重税に苦しんでいただろう民衆が抱いていたであろう怒りがふつつつと湧いてきたものです。

(エピソードその2) 1990年代の中ごろ、当然、携帯電話機など無かった時代、電話機のプッシュダイヤルを使って、1回の電話で12文字だけを送る「ポケベル」を使った通信手段が日本中で爆発的にはやっていました。公衆電話に10円玉を入れて12文字のメッセージを送信し、受話器を下して相手からの12文字の返信を待つというコミュニケーション手段です。

当時の若者は、直接会話をすれば10円10秒で足りる会話を、電話ボックスを1時間以上占拠して、たった20回のメッセージの往復だけに400円も費していました。電車の人身事故が発生し、身動きが取れなくなって公衆電話に殺到するサラリーマンの列ができていた公衆電話で、このポケベル通信をやっていた若者に、私は思わず後ろから「バカヤロー!」と叫んでしまったのを覚えています。

百人一首の和歌とポケベルの共通点は、わずかな文字数でメッセージを送る「短文コンテンツ通信」ということです。上に説明したような背景もあって、私は、短文コンテンツ通信が嫌いになりました。ですから、Twitterなる奇妙なコミュニケーション手段が登場した時、「こんな珍奇な通信手段、一刻も早く消えて無くなってしまえ!」と願ったものです。

嫌いなTwitterの威力に驚いた

この連載の初めての打ち合わせの時に、「Twitterって、なんとなく、好きじゃないです」と担当編集さんに語った瞬間、一場の空気が凍った——「あ、私は『何か』を失言したのだな」と直感しました。

そして、その理由、今ならよく分かります。本連載の第1回「『[海外で仕事をしたい](#)』なんて一言も言っていない!」のアクセス状況を、担当編集さんから教えてもらった時、私は腰が抜けるほど、びっくりしました。初日のアクセス数が、私の個人Webサイトの2年分のアクセス数に相当していたのです。



連載第1回の反響に触発され、Twitterを始めてみました。

これは、ちょっとあり得ない。物理的にも不可能な値ではないか、と思いました。思い付いたのは、TwitterとFacebookの影響でした。今では、毎日、連載のページの最後にある、ツイート数が増えていくのを見るのが楽しみになり、そのコメントを読むのが日課となりました。確かにこれはうれしい。執筆にも気合いも入ろうというものです。

私も研究員の端くれですので、一応TwitterやFacebookの仕組みや使い方は知っていました。[アカウントも持っています](#)。しかし、使い始めることができませんでした。それはなぜでしょうか。

友達がないからです。(友達が「少ない」のではなく「いない」という点に留意してください)。この現実、私にとっては意表を突くものでした。「Twitterが、なんとなく、好きじゃない」——そりゃそうだろう。始める前からつまずくような通信手段を、誰が好き好んで使いたいと思うものか。私は、イソップ物語の「すっぱい葡萄(ぶどう)」の原理でTwitterを嫌っていたわけです。なんという矮小(わいしょう)な思考体系。皆さん、おおいに私を笑ってやってください。

しかし、「ええい、もうそんなことは言ってられん。Twitterでも、何でも始めるぞ」と意を決し、[第1回](#)を公開したその日の夜からごそごそと設定作業を進めました。とりあえず、私の[個人Webサイト](#)の日記更新でもつぶやいてみるかと思ったのですが、そのやり方がよく分からない。第1回の連載コラムに対し、Twitterでつぶやいていただいた方をフォローしてみたのですが、このままでは、「私のつぶやき」は届かないらしい。どうやら、「私のアカウントをフォローしてもらおう」必要があるらしいのです。

どうしてよいのか分からなかったので、その方たちに、「ツイートしていただいて、ありがとうございました」と、簡単なお礼のリプライを送付させていただきました(これで良かったのかな?)。多分、皆さんのうち、何名かは、私の「つぶやき」をフォローしてくれるだろうと期待しております(経過については、また後日ご報告したいと思います)。

Twitterが初めて登場した時、こんな珍奇な通信手段、一刻も早く消えて無くなってしまえ」と強く思ったものですが、結局、無くなっていません。

それどころか、今やTwitterやFacebookは、社会システムを支える為になくてはならない重要な通信インフラにまで成長しました。新しいタイプのコミュニティの創成を促し、列車運行情報や天気情報をリアルタイムに通知し、そして2011年3月の東日本大震災においては救助活動の通信手段として、その効果は決定的に認知されるに至りました。

私は、20年近く、インフォメーションテクノロジー(IT)の研究に携わってきた、IT通信技術の専門家です。私たちの仕事の半分は技術開発、そして残りの半分は、IT通信技術に関する将来10年くらいの長期予想と、それに基づく技術開発戦略を立てることです。未来を正確に予見できなければ、技術企業としての経営戦略が成り立たないからです。これまで、大きく予想を外すことはなかったと考えています。

しかし、私の「個人的」な未来予想は「当たらない」。もう全然ダメ。そうですね、それでも例えば電子メールの登場だけは当てたと思います。しかし当てたと言っても、1980年代後半は、「電子メール」を使っているというだけで、「オタク」扱いされて、大学のキャンパスでは石を投げられるような冷たい仕打ちにあっていたのも事実です(工学部のキャンパスで、です)。

これ以後は、もう散々外しまくりました。まず、TwitterやFacebookの隆盛を外していますし、そもそも「携帯電話のメール」も絶対にはやらないと断言してはばかりませんでした。理由は、「数字キーで文章を打つような、そんな面倒なことを誰がするか!」と……。分っています、間違っていたのは私です。今の若い方は、スマートフォンを使って、私のキーボード入力より高速に文字を打ち込んでいます。



さらにさかのぼってみると、「個人によるインターネットの常時接続」の実現も当ててはできませんでした。インターネットが使われ始めた当時はPCの立ち上げと同時に、電話回線を接続するダイヤルアップによる接続が一般的で、「常時接続」は個人には夢のような環境でした。「常時接続」を前提にして執筆した私の発明は、上司に苦笑されて、自ら特許出願を取り止めるに至りました。出願していれば、今頃は……。うん、やめよう。まだ私はサラリーマン研究員を続けたい。

逆のパターンもあります。GPSなどを使った位置情報サービス(LBS: Location Based Service)について、私は1990年代後半から特許明細書を書きまくり、多くの特許発明とすることができました。しかし、なかなかLBSははならず、特許権の存続期間が相当経過した今頃になってGoogleなどが、LBSサービスの覇権争いを繰り広げています。私は指をくわえて、部外者と

して彼らの戦いを眺めているだけです。恐らく、多くのエンジニアも同じような体験をされてきたのではないかと思います。

「エンジニアは、未来を読めない」のではなく、「エンジニアだからこそ、未来を読めない」、または「未来は読めるが、その時期をピンポイントに特定できない」という表現が正しいと思います。どのような緻密な分析も詳細な調査も、エンドユーザーの好みやその時代のトレンドの前では、ちり、あくたのごときです。

ですから、「新しい技術」が登場してきたとき、利用者であるあなたの取るべき戦略は、エンジニアの語るバラ色の未来に耳を傾けることではありません。「場当たり主義」に基づき、「好きか嫌いか」、「使えるか使えないか」、「安いか安くないか」の二者択一で判断すれば十分です。ゆめゆめエンジニアの預言なんぞを当てにしてはなりません。少なくとも、「私（江端）」を信じてはいけません。絶対、当たりやしないのですから。

「140文字」というすごい発明

さて、[第1回](#)の連載でも申し上げたように、私は「人から面白いね」、「楽しいね」と、褒められることだけが好きな狭量(きょうりょう)な人間なのです。ですから、私の個人Webサイト「[江端さんのひとりごと](#)」は、訪問していただいた方が、コメントを残せないように設定しています。

理由は明確。ネガティブなコメントをもらうと、私がへこむのです。すごく簡単にへこみます。高慢で尊大な批判エッセイを毎日投稿しているにもかかわらず、自分に対する批判には、豆腐のような軟弱さなのです。つまり私は、一一批判するのは大好きですが、批判されるのは大嫌い一一なのです。自分で言うのもなんですが、正直な人間だと思っています。

ご存じの通り、Twitterは140文字以上は記載できないことになっています。これはすごい「発明」だと思います。人類の2大発明である「火」と「車輪」に匹敵するくらい、すごい概念だ、とまで思います。私がTwitterを受け入れることができる、最大の理由はここにあります。なぜなら、「どんなに強烈な批判であっても、140文字以上は記載できない」からです。これはうれしい。すごくうれしい。140文字の批判なら、なんとか耐えられそう。へこむ時間も少なくて済むはず。これなら、私であっても連載を続けていくことができそうです。

これから皆さんは、私のコラムを読んでいただくことで、その浅学で、狭量で、ひきょうな私という人間を看破することでしょう。そして、それに対する正当な批判、批評がインターネット上で飛び交うかもしれません。正直、嫌だなあ、と思います。しかし、私が、「昔はものを思はざりけり(権中納言敦忠)」という和歌に対して、「民衆をなめとんのか、このヤロウ」と批判するからには、やはり私も批判を受けなければなりません。

分かりました。私も執筆者として、正面から批判を受け止めましょう。一一ただし、140文字以内で一一そこのところ、何とぞよろしく願いいたします。

本連載は、毎月1回公開予定です。[アイティメディアID](#)の登録会員の皆さまは、下記のリンクから

、公開時にメールでお知らせする「連載アラート」に登録できます。



Profile

江端智一(えばたともち) [@Tomoichi_Ebata](#)

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈(しれつ)を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣(しんらつ)な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[江端さんのホームページ](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

関連リンク

[筆者の個人Webサイト「江端さんのホームページ」](#)

Copyright© 2016 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

